第74回日本酪農研究会 開催のご報告

雪印メグミルク株式会社　酪農部酪農グループ（扱：酪青研事務局）

日本酪農青年研究連盟（酪青研：檜尾康知委員長）主催の第74回日本酪農研究会が、11月15日、全国各地より会員および関係者約280名（当社人事部研修生20名含む）参加の下、福岡市のホテルオークラ福岡にて盛大に開催されました。来賓には農林水産省や福岡県庁をはじめとする関係行政・団体および当社グループ役員各位のご臨席を賜りました。

開会式の冒頭、檜尾委員長は昨今の不安定な経済・酪農情勢に触れ、「日本経済はポストコロナへの移行に伴い、内需主導による景気回復と賃金上昇による、消費者の購買意欲の高まりが期待されております。一方、我々酪農家に対しては、安全安心な牛乳乳製品の安定供給、持続可能な酪農への取り組み強化が求められております。酪青研も時代の変化に対応できる経営力の強化や、営農技術の向上への対応が急務であり、そのためには我々の原点である研究活動をより一層充実させるべきであると考えます。」とご挨拶されました。

続いて、当社グループを代表して佐藤社長より、雪印メグミルクグループが、2025年に当社の前身の一つである北海道製酪販売組合の設立から100年目という節目の年を迎えるにあたり、「新型コロナウイルス感染拡大によるパンデミックの影響も落ち着きを見せ始め、経済活性が期待されていましたが、近年では自然災害の増加や紛争による国際輸送の混乱、資源エネルギー価格の高騰、大幅な円安など、激しい変化が生じています。酪農乳業へ目を向けると生産コストの増嵩、牛乳乳製品の需要低迷が挙げられ、食料供給における持続可能性の向上が強く求められています。これらの情勢を踏まえると今後の社会課題として、世界人口の増加等に伴い食料需給のバランスを保つ事が困難となり、当たり前に手にしていた「食」の供給が難しくなる可能性があると言えます。」と今日の社会環境を俯瞰したなかで、様々な課題について提起されました。

更に佐藤社長は当社グループの「存在意義、志」にも触れられ、「今、当たり前に手にしている「食」というものが、これからも当たり前に続くとは限らない。そんな課題を解決するのが、私たちのミルクバリューチェーンです。私たちは創業者達が掲げた「健土健民」の精神を受け継ぎ、「魅力ある乳・乳製品」や「乳で培われた知見や機能を活かした新たな選択肢の提供」を基に、酪農からお客様までつながるバリューチェーンをより強靭なものにしていきたいと考えています。」と決意を述べられました。

研究会では、全国から選抜された酪農家６名の経営発表と５名の意見・事例発表があり、経営発表の部においては、「カメレオン酪農～環境変化にしなやかな経営を目指して～」と題して八ヶ岳地方連盟の五味英介さんが最優秀賞（黒澤賞）に輝きました。

五味さんは、「地域に根差した持続可能な酪農経営を、あらゆる視点から検討し対応する“カメレオン酪農”」という考え方の下、①国産自給飼料の拡大②飼料給与の見直し③乳房炎ワクチン接種④乾乳牛舎の増築と積極的に経営改善に取り組んできた内容や、乳脂量日本記録牛を輩出する等の実績が高く評価されました。

また、意見事例発表の部では北海道から九州までの若手酪農の経営者が、将来に向けての夢や目標を語りました。

発表会後の講演会ではアルピニストの野口健氏をお

招きして、「目標をもって生きることのすばらしさ～モチベーションを持ち続けるために～」と題して、どのように目標を定め、取り組んできたかをご自分の経験に基づきお話しいただきました。

今回の大会は、コロナ感染症が５類に移行された後の初めての大会であり、多数の会員が参集し積極的に意見交換する等、酪青研会員の絆を再認識し、酪農経営における課題や改善に向けた取り組みや成果について学ぶ貴重な機会となりました。

「研究活動の一層の充実を！」挨拶する酪青研：楢尾委員長

「バリューチェーンを強靭なものに！」挨拶する雪印メグミルク株式会社佐藤社長

第74回日本酪農研究会全景

企業展示風景・・・雪印メグミルクグループ商品をPR

雪印種苗株式会社笠松社長より「雪印種苗賞」の授与

雪印種苗株式会社笠松社長より「雪印種苗賞（副賞のシクラメン）」の授与

道東営業部より新年のご挨拶

道東営業部長　鎌田　国博

新年あけましておめでとうございます。

令和６年の新春を迎え、皆々様におかれましては、益々ご健勝のこととお慶び申し上げます。また、日頃より弊社事業につきまして、特段のご理解とご支援を賜り厚くお礼申し上げます。

2023年は５月より新型コロナウイルス感染症が「５類感染症」に移行された事で制約ある生活から従来の日常を取り戻し始め、人の動きも活発となり円安でインバウンド消費も戻ってきております。

ウクライナ情勢の影響により高騰した穀物相場や原油価格は一旦落ち着きを見せ始めていますが、外国為替の影響で飼料などの生産資材は高止まり、物価への影響は先行きの見通せない状況が続いています。

世界情勢の変化により日本の農業が大きく影響を受け、海外に依存せざるを得ない状況ですが、一刻も早く海外からの輸入飼料に頼らない国内飼料基盤に立った足腰の強い酪農、畜産経営を目指す事を改めて思う次第です。

北海道の2023年産自給粗飼料は、経営の要となる１番牧草は適期刈り取りができ品質、収量ともに確保されましたが、２番牧草は干ばつの影響で品質、収量に地域差があるようです。デントコーンは台風の影響もなく無事収穫ができ、厳しい酪農経営が続く中ですが粗飼料状況は概ね良好でした。自給飼料の質、量は経営を左右し、良質な自給飼料の生産は、足腰の強い経営をつくる重要な事のひとつとなると思います。

弊社としても草地更新や肥培管理技術の対応をさせていただき良質な自給飼料の生産と、「土づくり、草づくり、牛づくり」による北海道産の乳畜産物の生産に寄与し、自給飼料にあった配合飼料の開発と飼養管理技術の提案を進め持続可能な酪農生産に貢献させていただければと思います。

また、ご愛顧いただいております種子は海外での採種および生産が大半であり、世界情勢、天候状況によって不安要素もありますが、皆様に安心してご利用していただくように努めてまいりたいと考えております。

本年も長年にわたって培ってきた技術やノウハウを活かして酪農・畜産の生産現場にしっかりと目を向けた数多くの商品と技術を取り揃え皆様のご用命に応えたいと考えます。

今後とも、皆様のご健勝と益々のご繁栄を心からご祈念申し上げご挨拶といたします。

道央営業部より新年のご挨拶

道央営業部長　小野木　修

新年あけましておめでとうございます。新春を迎え、皆様におかれましては益々ご健勝のこととお慶び申し上げます。平素は、弊社製・商品に対し格別のご高配を賜り厚く御礼申し上げます。

2020年から猛威を振るった新型コロナウイルス感染症は、昨年ようやく落ち着きが見られましたが、その間に大きく変化した世界経済、世界で起きている紛争はエネルギー、穀物相場に依然として影響をもたらしています。また、円安の影響もあり物価高に歯止めがかからない状況が続いています。私たちが関わる農業分野を取り巻く環境を見てみると、ピーク時よりも落ち着きは見られるものの、肥料や資材、飼料の高値が続き、反して酪農畜産現場では子牛価格の下落が継続し、農業経営に大きな影響をもたらしています。

そうしたなか、本年４月には運送関連の法改正が予定されており、労働時間の制限に伴う増車や人件費の増加により、生産物だけでなく営農資材の輸配送費用の増加が見込まれております。また、昨今の世界情勢、異常気象の影響から、種子の生産も従来のようにはいかなくなってきております。弊社としましては、全力をあげて皆様のご期待に応えられるよう努めてまいります。

農業は適地適作という言葉が示すように、地域に合ったものを必要な分だけ循環させることが持続可能な農業につながるものと考えております。弊社創業の精神である『健土健民』という黒澤酉蔵翁の言葉を常に意識し、これからも生産者の皆様と共に持続可能な農業の発展のお手伝いに取り組んでまいります。

本年も農作業の無事と皆様のご健勝をお祈り申し上げ、新年のご挨拶といたします。